

日本母乳哺育学会理事長就任にあたって

昭和大学医学部小児科学講座教授

板橋 家頭夫

平成24年度より日本母乳哺育学会の理事長に就任いたしました。小林登先生、牛島廣治先生について理事長に就任いたしますことは、非常に光栄でありますとともにその責任の重さを強く感じております。

日本母乳哺育学会は、小林登（東京大学名誉教授）先生をはじめとして多くの先達の方々が、母乳哺育を科学的にアプローチし、それを医療や社会に還元することを目的として発足したものと認識しております。これまで本学会学術集会では母乳と育児、正期産新生児や早産児・低出生体重児における母乳の栄養学的意義、母乳分泌のメカニズムの解明、母乳育児の社会的・公衆衛生学的意義など様々な視点で議論がなされてきました。今度もこのような視点を維持するとともに、その成果を学術団体としてよりいっそう社会に発信していく必要があると思います。

母乳育児は子どもにとっても、母親にとっても、また社会的にもきわめて重要であることは論を待ちませんが、一方で、医学的理由により母乳育児が困難な母親がいることもまぎれもない事実です。私たちには、このような母親が自責の念によって社会の片隅に追いやられないように配慮しながら母乳育児を進めていくことが求められています。

母乳育児の推進のためには、ただ声高にアピールするだけではなく、その科学的な背景を認識し、それをもとに母親にわかりやすく説明し理解してもらいながら、個々の家族にきちんと寄り添うことも必要です。さらに、母乳育児推進の障壁となっている諸問題（例えば分娩施設の母乳育児支援体制や、薬物療法中の安易な母乳遮断、母乳分泌に関するエビデンスのない指導法など）を解決することが必要です。

また、時代とともに生活環境やライフスタイルが変化しており、出産適齢期の女性としてその影響を免れることは困難です。このような変化が育児行動や母乳成分にどのような影響をもたらしているのか、あるいは子どもたちの心身の健康にその影響が及んでいないのかなど、今後私たちが向き合わなければならないことからは枚挙に暇がありません。

これからも、様々な職種や研究領域の会員の皆様とともに山積する課題を少しずつ解決しながら母乳育児支援をめざすことを主眼とし、学会の運営に取り組んで参りたいと思います。なにとぞご協力のほどよろしくお願いいたします。